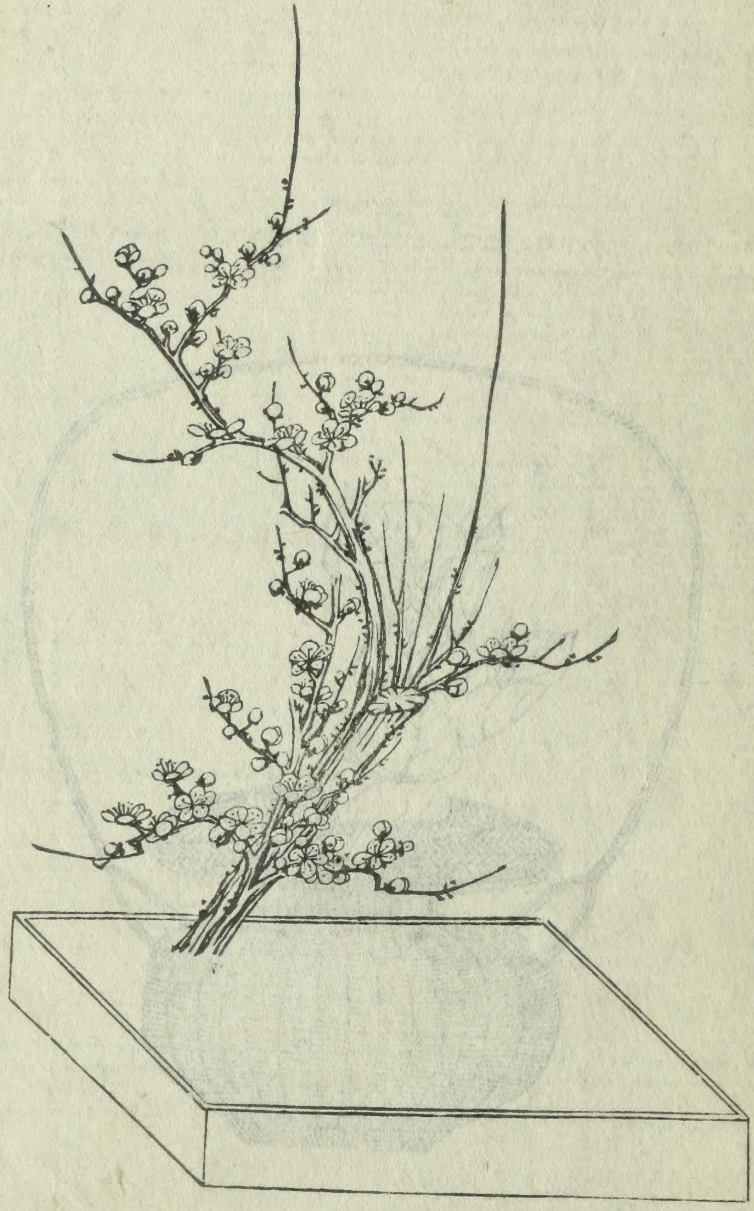
松月堂百瓶

文

F.SB
450
.I2
v.3

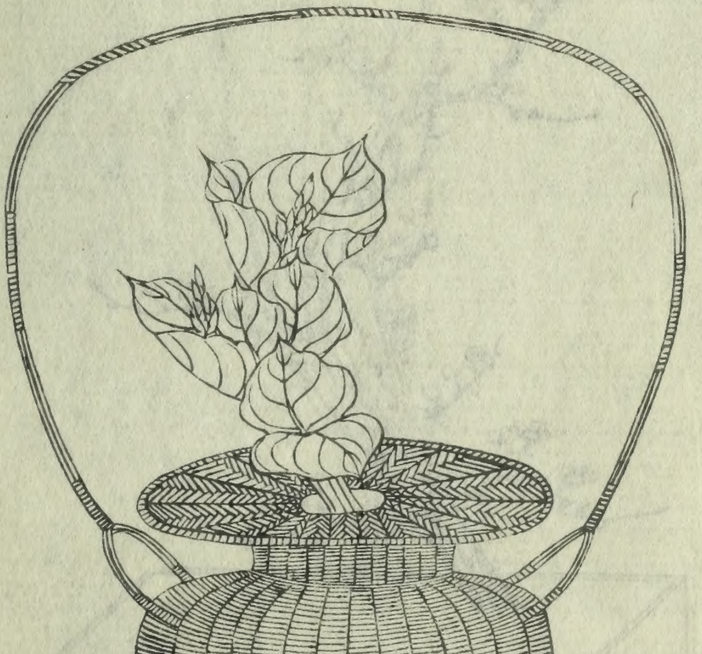
薄紅梅



青簾舎

松琴

玉簪草



閑處

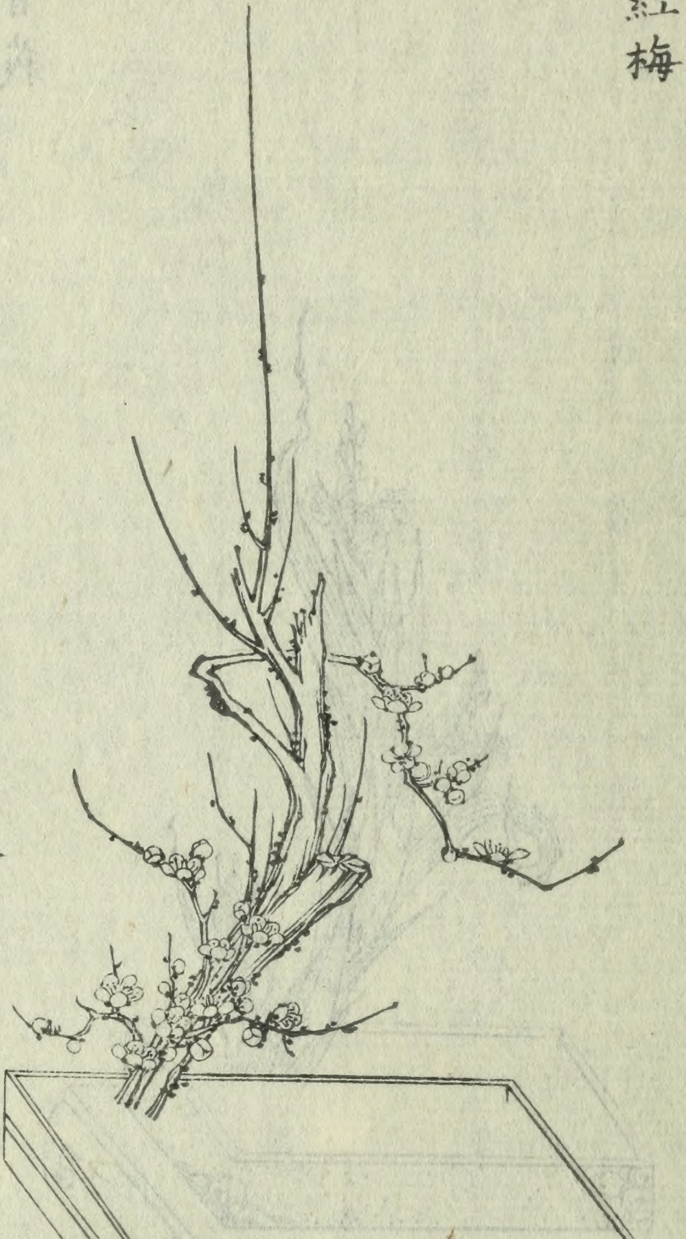
庭徳
馬蘭

石樵

柘榴

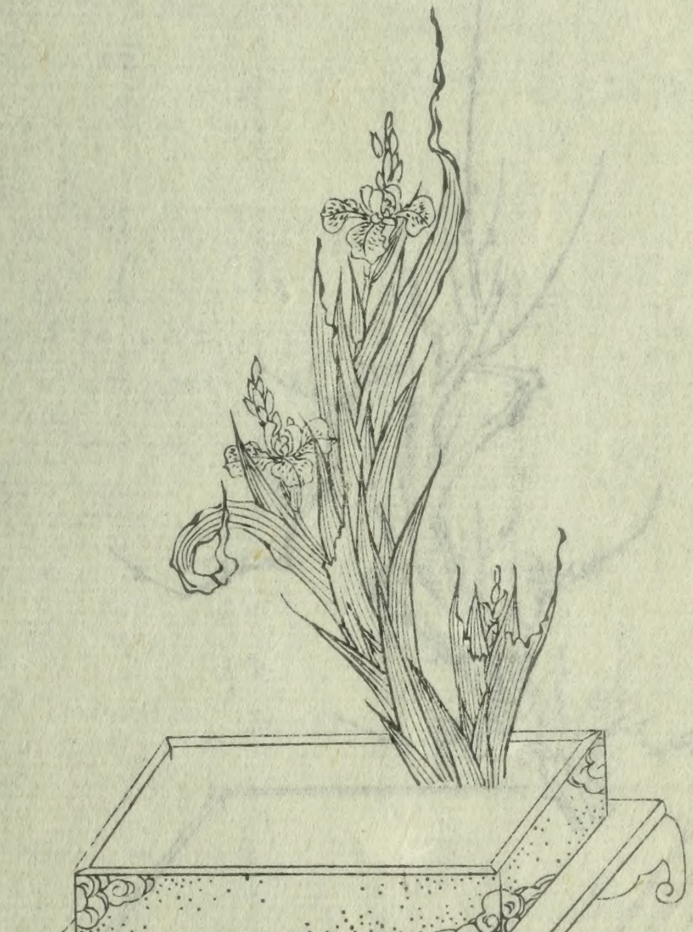
松菊園貫齋

薄紅梅



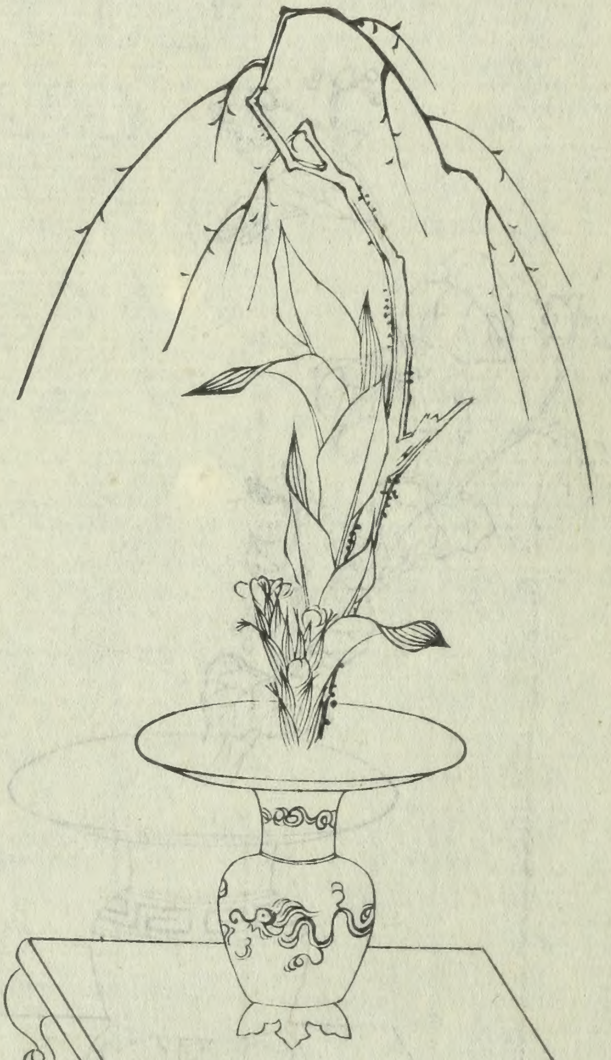
釀春亭
呂映

著莪



淇水園
里兆

亀柳
馬蘭
福壽艸



耕翁

秋海棠

堯甫

山吹

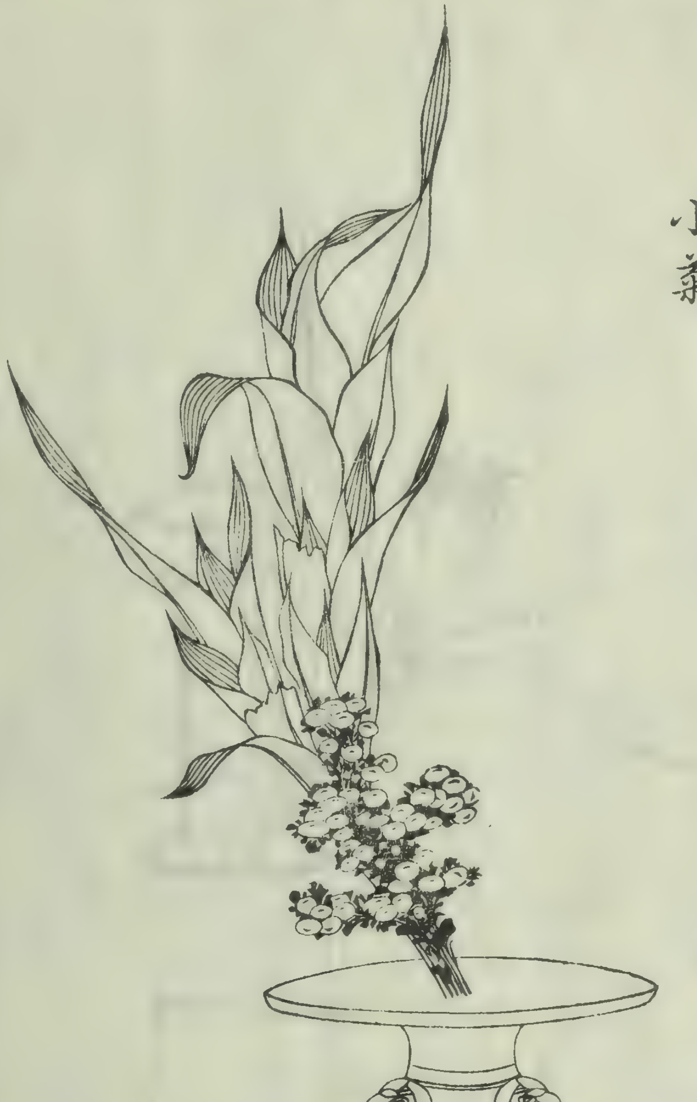
山霞亭
江月

白梅

萱艸

奇風庵
翫古

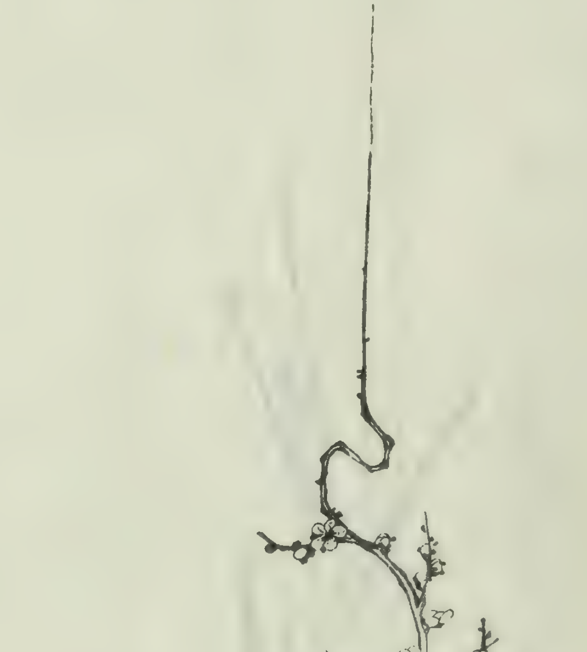
馬蘭
小菊



御門人

一艸舍玉英

薄紅梅
白椿



是屋
松江

杜若

如水

羽蘭
百合

瑞雲軒九皐

白牡丹
口傳
御直門
瑞升軒主人

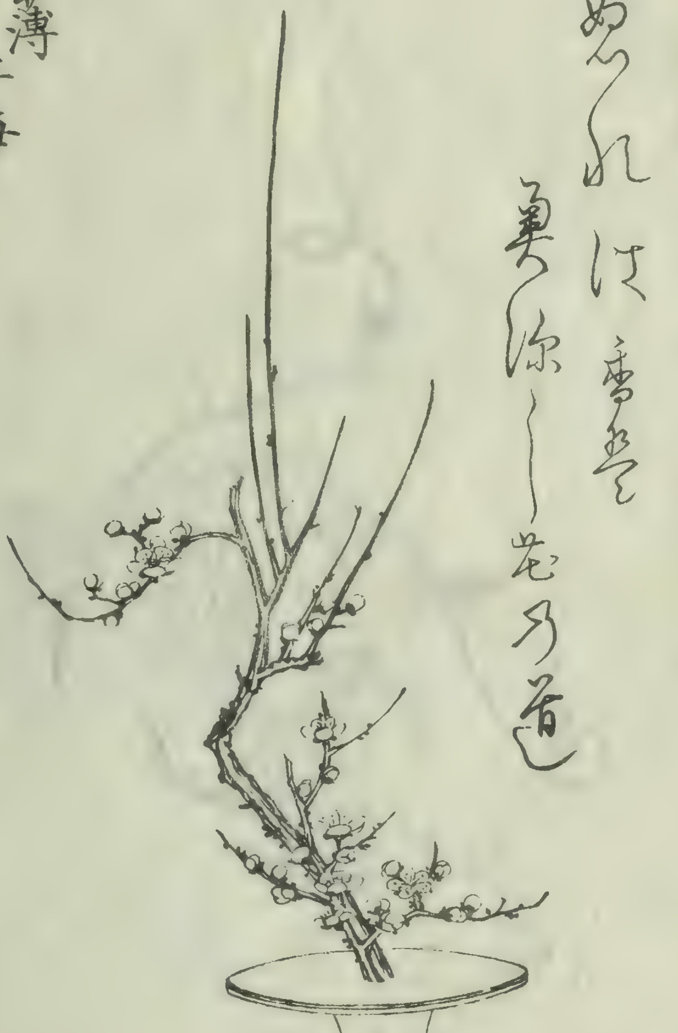
藤
著莪

嵓松庵
一鷹

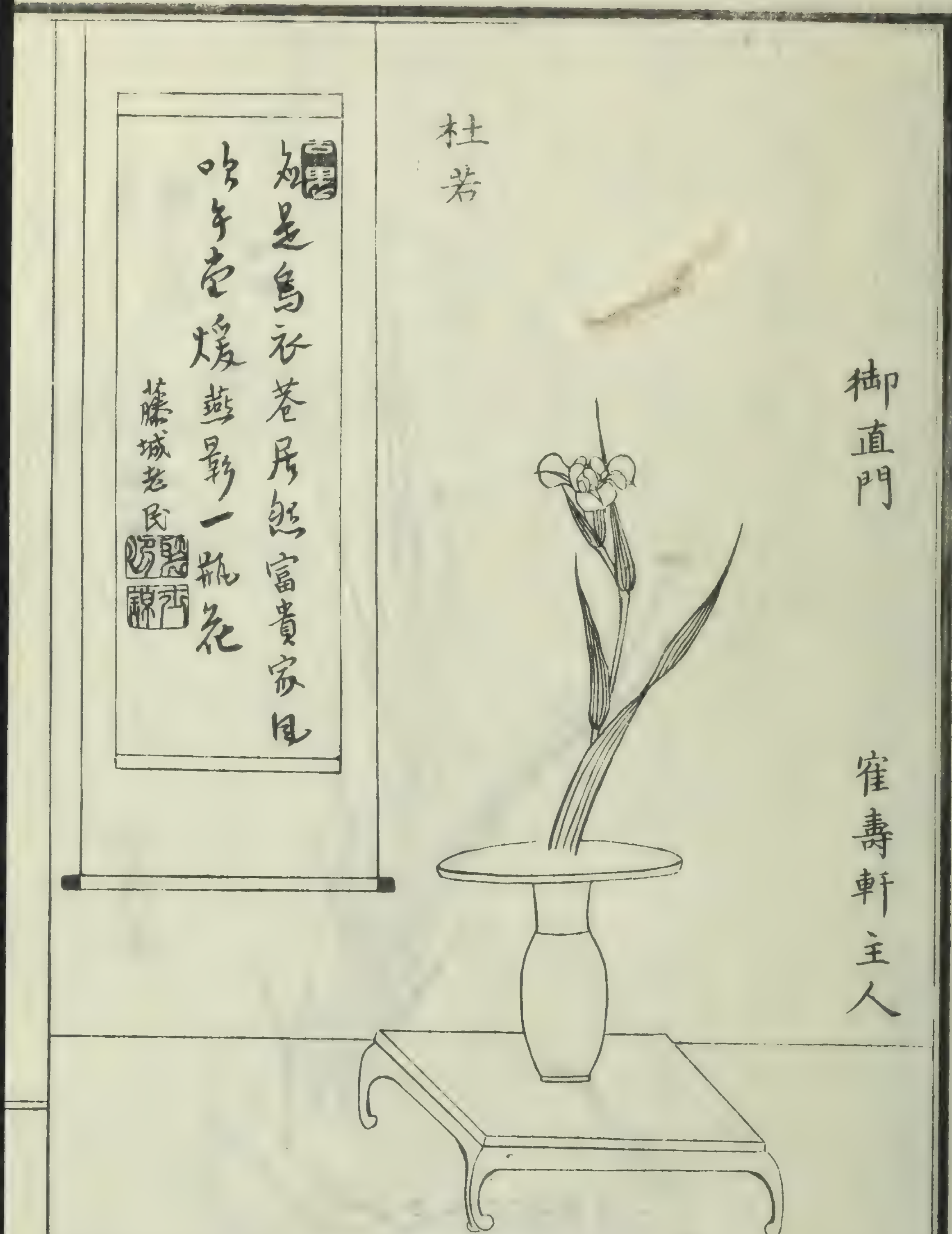
薄紅梅

入ぬれは香色
奥深し花乃道

御門人



清華軒豊成同詠


杜若
如是烏衣巷居然富貴家風
煖燕影一瓶花
藤城老民
御直門
崔壽軒主人

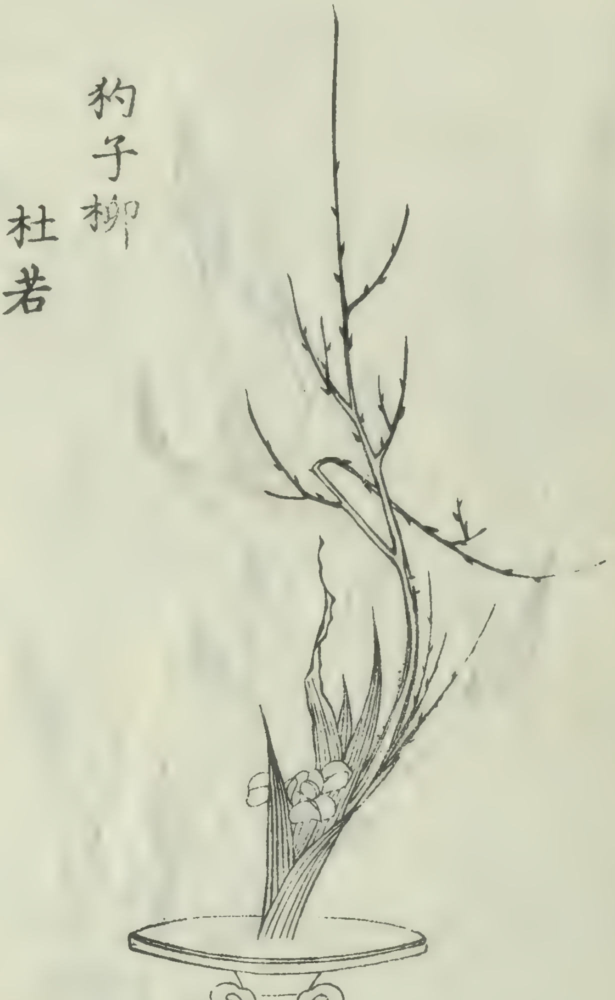
江甫艸
燕子花

御門人

百艸舎

御門人　迦凌臺教有

杓子柳
杜若

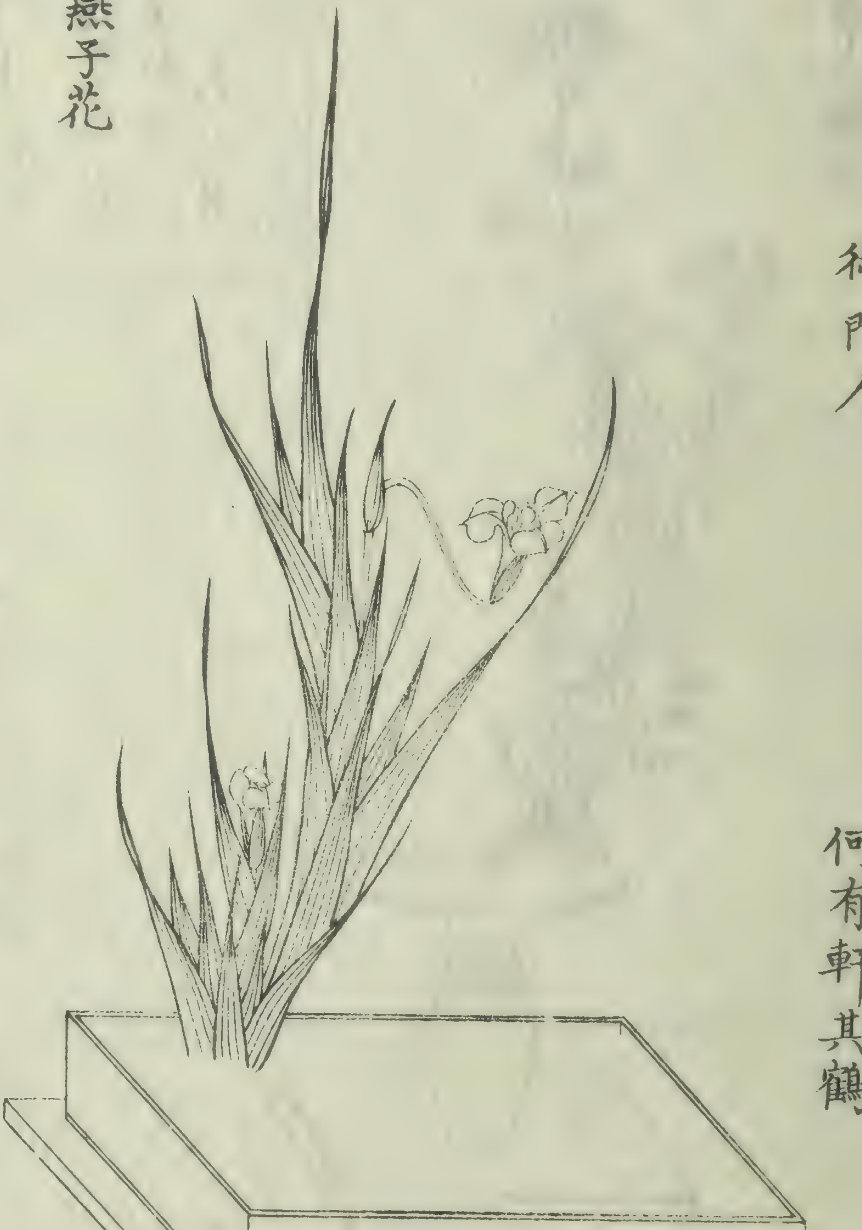


馬蘭

御門人

梅月軒

燕子花



御門人

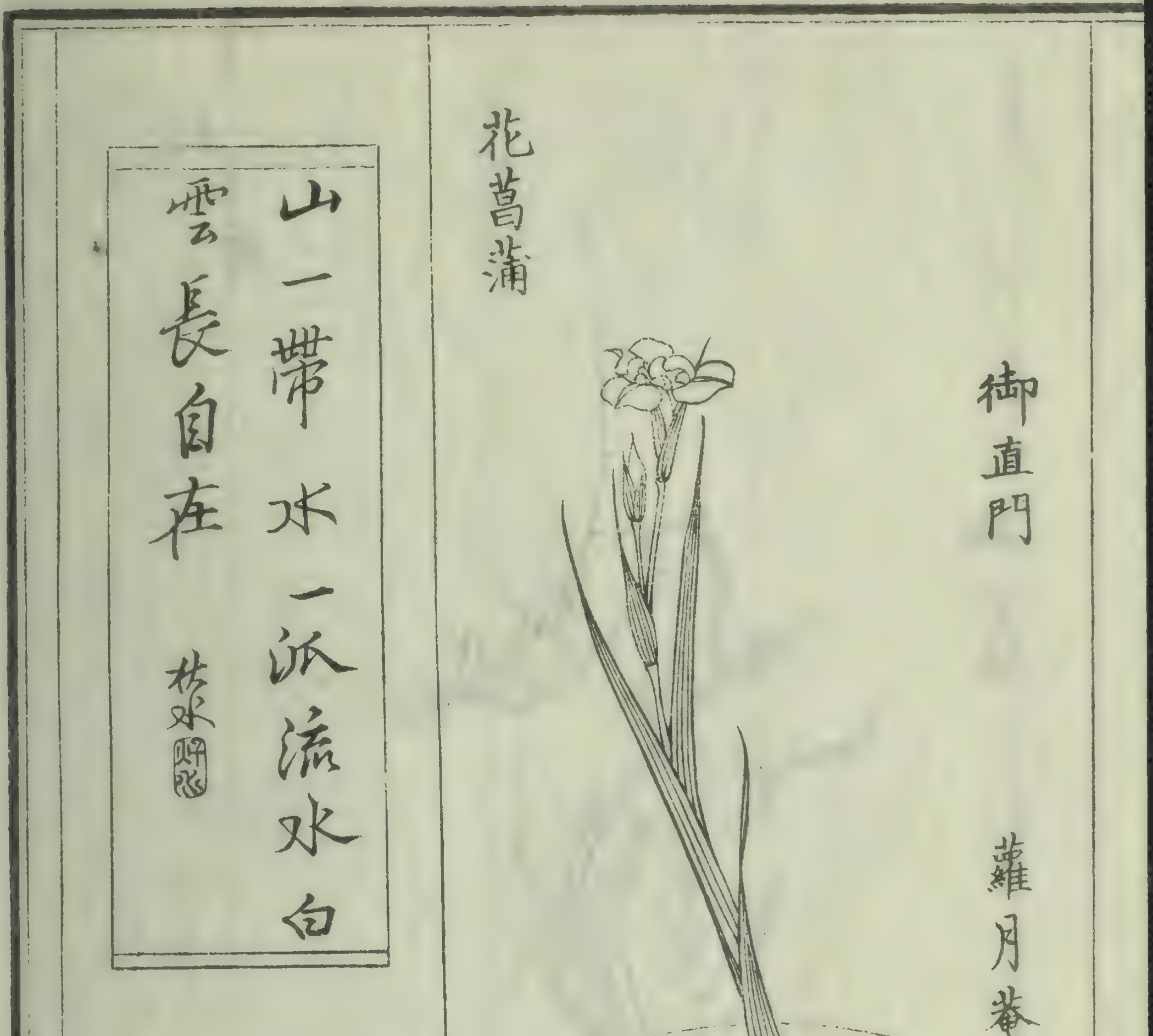
何有軒其鶴

白大輪菊
紅峰
御直門
秀華亭主人

梅
羽蘭

御門人

寸松堂鶴壽


御直門
蘿月菴主人
花菖蒲
山一帯水一派流水白
雲長自在
梵水

白梅

幸般亭
士隠

梅

御直門

松榮軒主人

本紅長春

楓錦齋 大秀

杜若

御門人

青山亭兎月

御門人

不驕堂龍水

連珠

椿

垂梅
御直門
瑞升軒主人
桂崖居士

垂柳
椿 羽蘭
水仙 寒菊

欄外觴芳

爲百華道人

鄭瀨聲

山櫻
口傳
御直門
鳳鳴館主人

御家元

従四位上雅恭卿御詠

ゆく
まさ
りゐる
はしけきむ
えゝねきゐるの
ふ系
あね
ねも
しるく
みきの

白椿

挿花主盟
一如斎百華道人

百華道人以插花名遠邇來
受業者日多而岐異為說矣頃者
以衆人所揮者為譜請余題其端
乃錄二十六字云

一枝安危沙頭玉百尺長沈井
底瓶何物瓦瓶孫大孫猶來之
芳六千春

時弘化三年丙午花朝余書於彼山之
西行庵風雲酒林翁於百花之叢
亦一奇觀也噫若書若画一樣參研
以呈宇宙嶽先生邊

百華道人之攝此卷也、求序於家兄、亦属跋於余、噫余不解瓶花、特知画山水耳、然理一也、姑舉畫法以論之、凡吾之山水不必拘之于法度、

但其山之向背揖遜雲烟生動要以寫其真于紙上為足也唯挿花不亦然矣已惠十友四君而下百卉千草其挿以向瓶中皆其不沒真面目不留纖營痕迹斯可矣

不然翦拔刻葉、徒用許多矯飾、花之氣耗、而花之神遺矣、是兒童之戲已、道人之意蓋亦在于此耶、是此書之所以撰者也、其勉勵後進也偉矣、詎俟它人之

讃語耶曰跋、

弘化二年乙巳秋八月

秋水老漁源山徽

發行書肆

東京日本橋通壹丁目　北畠茂兵衛
同　同　通二丁目　稲田佐兵衛
同　同　通二丁目　小林新兵衛
同　南傳馬町壹丁目　吉川半七
同　神田松住町　別所平七
同　淺草茅町二丁目　北澤伊八
京都三條通御幸町　大谷仁兵衛
同　同　桝屋町　出雲寺文次郎
同　同　寺町東　福井源次郎
同　寺町四條上ル　田中治兵衛
大坂心齋橋筋北久太郎町　柳原喜兵衛
同　同　南久寶寺町　前川善兵衛
同　同　博勞町　岡田茂兵衛
同　同　南一丁目　松村九兵衛
尾州名古屋本町通八丁目　片野東四郎

松月堂百瓶　天

百華先生著

松月堂百瓶

東壁堂發兌

松月百瓶序

百華道人以善瓶花聞近撰其從遊所插能入格者百瓶繪畫爲寫註其插者之名附其挿花法數則併以梓行問世請序於余今夫人之升一堂入一室灑掃潔淨覩其有瓶插花以置則心自怡然嗜詩者生詩思嗜茶

者成茶趣豈止詩思茶趣至於適心禪機亦有對此而發焉者矣故佛典不言乎拈花微笑鄒孟氏有為長者折枝之語固願大而雕牆峻宇稠人廣坐之盛饌小而甕牖繩樞小集偶坐之淺斟為求所以使人之心思至娛樂者則瓶花之設亦不可闕者也

是所以為道人之有此撰而與諸後進
也道人之瓶花所插僅止數枝此雖
小技也而象之於五大五大衍之曰
正曰令曰通曰體曰指乃又象之於
易取之水火既濟初九指也六二體
也九三通也六四令也九五正也指
即陰中陽水以滿于瓶也體即花面

弘化乙巳桂月初五日書於藤城山房雨窓

梅下學究

むかし世の人に春秋にさゝいつれか事
のこ所を絶優へ明らかにしまかし事ならぬあき
ゐにむまつひくく花に中ふしをれせむあるらく
もえもにいろそ思なしにみたえにへるらむ
とをかし母今もはゝあれはみな花をめての
こゝろあるを世にあらさりし花をいとおもはるにい

はじまりてちはやぶる神よりうたありき
海につけ本ことの葉かしくをつたへに
さしあたる庶の道に授けまく継文二見えや
はやみけき哥ひはしるとしたまひしてこ
あふがれ哥けるは清まるみ中に聖
山に松ひりて松本ことにおのへふるなる比

すなほに女も手ならし母のをしへを思ひて
むかしより女はつかひあしきことゝけり
なく年月を経て老ぬれば書なれたり
はへきわさにあらすはふ遊をいふこそよからめ
うつくしの親にならひ書ものゝはしをもしへらる
にほへあるは法則をしてまなはせよし

かくて世にしるくなりけるのちにからの本
なりやつ年へにけむあまたにしてくさなむ
はまたゝみかりなる人さはにおもひ傳紀二けな
さ思ふに一如庵の大とこちかう年ころより
はなみちまふかく何色いりてかさつけり
もとさにけなとらせつる紀氏なる傳ゐなれ

かゝ経ハ女人の三世の佛に花をそなへたらく
に経をよめる業はしたしくなる事はかゝる
かうしくなりては元ある事ゝ佛に母の契を
経しく有の心はあらそひつかはの
みちにおしこくるのわきまへたらてかけれ
ちぎりしへはしらざる人ハ春のやしの枝

志らく秋の夜の手すさびにや海なるは濱
ならはしに我し入子の語らふ事よりおこる
に今然て家見二流となし其の法則にならえ
かりしてらぬ人のよしとなえ見るべくよし止
けむし花紙百種を語に寄せしてあむる
絵けむをあらは木をうつりてうつしむる

わらはへにさうけおかハ起こる事なかるへくな
了みとなすとも手習むとはなる大事の中なれ
ならへくは是海年二冊のかくわたるなり
うつねきをにさ中起なるしまひこそ
なへてことはりなるにおかしはかきいまゝき
わかけれかつ事ハ不審はなるハ秘なりさり

ちとせかはらぬ絶こえそらにてちよつに
世なくてさ梅いけよはなとゆなさるなくきあ
なつのちいはなる年の麻に尊とそてか
聞く蛙はねかはみてはなゝもてなる年に来
あるしいくる生あ志しも

河村有香郷

自序

予は元と淡海の國保の小角兵基七と云し松の尾北里妙覚精舎にて長となり幼年より勤行のいとま有る折々は生花に心をよせ尤たのしみ其後は法に進てより勤ひ其道の諸君にもさしたる導こと多年于時天保三年の比より甚山寺を出て諸国を経歴し今美濃の国なる岐山の邊り白金と云へる家

里に草れ庵は結ひ皆く足は止め有為無為の
婆婆ちりあさ世の及さ海を観し空に山居の
袂松の木陰笑の編戸風雨を厭ふとして日々
いと海あまたは梅桜桃柳夏は名あれは澄
清く杜若菖蒲なとの其のつらら咲乱れるかを
楽し観し秋は桔梗女郎花藤ちこの海桃の栗わする
婆にわいは梅し冬は囲炉の気もりに居く茶は

嘲し古今を黙読し四時こゝ無情の草木をも伴の

友として己ら精誠書の工に立る滕にいへ

るより誰譲ふともなく清雅は好める人の詞

にあらくいろく趣様ふうちに草に風のなびけるか

とりいふむすとく心の靡きあひとく歌ゝ讀むた

に奈人破山の下に始く両三集いてきし史より

常盤木の種まいはをてし門葉の栄へ繁りあへり

ぬるなりけり我らちからにはあらざれども当流の
道の正しきこと天より是をもとゝしむる所な
るかれ志し九年に及び予が門葉の人十以千に
あまれり故に予に初めより従程の輩の需めにて
同社の挿花秀花百瓶を写して梓木に鏤めぬ
は花供養の一助ともなれ捧へしと備ふるの頗きを遣
とも予元より文理に拙し筆は女の複きに似て

陳し百瓶撰善まるみ事及ふ所にあらずして園
く辞まれども許されざりきさらく世の嘲りをかへ
りここに岐阳百瓶と題号して自ら禿筆を
もつて写しおはしもとこふ桂崖老兄に請ふ
て画に著し画家の業まて兄しあり
しめんため鄙語をもつて挿花の旨意を述
ふ嫂の君子あきらけくおもゆれば是非世井

必にせんとすれはあまたに唯射中其一箇体用を
働くの便りともならんことを予か一ツをとゝめ書
となし諸門人に示すのみなり

弘化三丙午春

一如菴百華道人述

予は若き時より蒲目庵と号せしにおなし
里ゆゑに娯むぬしよその庵号を譲りて予は
一如庵と称はしまさん

凡例

一 夫近世挿花の風義流家百派に別るといへども其本原に二ツあることなし中興一露卜友茶来翁氏三哲の著述ある所の諸書まゝ花道の濫觴因由及び大概写出せり仍て是ハ略すといへども今世まで益流説濫りにして人欲日々に増長して本意を離るゝ事は拙業のやうに思ひ誓学んでさへや事理の尽たるやうに心得古義を乱さんとし唯異形変体の相のみに執着して其流祖の邪癖なるを取用ふる人多くあれ

是全く花道の深味と云へども傳のゆゑなり根本末
あり理を学ぶべし然古流の花形ハ五大を家中に
含蓄骨体として花法の規矩によりて是を予が社中にも
別法のやうにする人多し是なんぞ別法ならんや
草木の出生は花道の質規則ハ此道の文なり文ハ
時として異なれども天地の同一理にして
かくの如くなれバ偏よる人ハ本を忘るゝのうらみあり
五大は五枝をもつて其体とし夫より二十五枝互に
其用となる時ハ千態ハ変化なり時に随て変化して

道は順の理を喩しをしゆふの書たる事本先哲
の出せる是を三巻とせり此分骨混合の次第ハ浅き
より深きに至る教相なりはやく此理を会得せんと
おもハヾ当流御家元の二軸に伝書あり尚くハしきを
受て学ぶべし其源ハよく至りぬ然して諸道を
学事生涯を尽しも至りかたくして尽されバ花
道ハ道学淵源を知らしむのをしへ仁義礼智信五常
の理を法則をもて探しむるものなりしへなれぞ至る
近き意味なりて一旦意楽乃窓より入て花道の規

矩準縄に随ひ信成もとして天然自然の理を
よく工夫する事を肝要とすべし

生花習ひ方心得話

一 先生花の奥儀を覚んと思ハゞ法度定式を知りて初は草の花の花形を指覚え夫より行草の分胄に移て九品の花形全備二十五体までの割をもて鍛錬をすべし まづはじめハ事を吟味の習ふべし中頃にハ事と理と車の両輪のごとく心得て挿べし上手になりてハ事を捨て理を工夫すべし 扨

以てせずして強に偏る事なれ唯理のみを好む時ハ
事外行が闕る故事に即して理を照し理
即して事を修し是花道深玄の要なりされば
分骨混合の理を外して云師に具り格を離
て格に合ひ習ひを捨て習ひに據の功徳あるゆへ
浅きより深きに至りて一瓶の中に無益の枝葉
を除き清潔風流に挿すことを修すべし

花挿仕用本玄の語

一 花葉枝ともに自然の恰好よきを以て出生

有の儘を挿成す是生花の本意なりとしるべし産のまゝにして姿形好きは稀なり因て大方ハすこしつゝためなをして風躰をとり見合挿る事なりされども多くハ横へ育し枝をすて挿くし茎ひたはすに作りされど出生を知るべきゆへともあらはして茎ハ上手のはからひ業なり摠て草木搖動の働きは悉く口傳多し

生花規矩之話

一 此一ヶ条ハ先哲一露翁の舊證なりといへども家に

出るを都て生死ハ出生の有けれ儘を観るに移りすまを
いふ花ハ活流とするいふ物なれども唯水際葉組なぞ
かりふんりとよせしく出生しいふ源を心得し人なく
なし草木ハ天地の化育に因て陰陽等分に生ずる
者なれども草木の種類に随ひ出生の地に随ふし
て或ハ陰に偏り或ハ陽に偏るもあり又初盛
残に順ひ目役に相の変を有るも生花乃
道に通達したる人ハ格別初心の学にはじめより
有の儘に生る事ハ空論に帰し規矩なく終にハ花の

鬼神と共に顕て出生とも違ふ事ある可し
万事に規矩なきものはなし有の陰乃内に陽
而備る中に取成あり是生空の規矩なし
て自らしてぞ天地自然の理なり委敷は口傳
故に茶道の意味を述る所は同じけれども予が社中
答し茶道なり執心の輩多し依て茶範しいて意味を
聊出しる所
一 其昔栂の尾比明恵上人ハ正し茶の祖といへり
世の人のみなしる所なり然ハ此上人ハ何事も天性
に背かずして自然の理を守にかまへなく其相なく又居まさ

やゝしく叢林しかひし後花茶ともに十流百派あり
分かれしかども中興茶道の高名は千の利休宗易
なり是等の人はみな此流の奥儀を渡つて本
来無一物又大極は無極なりし悟道に及びて茶
花にも宗易も無法を称せり又中には時の作意方
れども古代の人は茶花の道強く詮議し
奥儀を探り妙術は潜し其功を後代に遺せり
今世の茶人は多くその意を志さず歟無法の茶なるといふは
唯花りは法なしといふ者ありしのを知りて時の作意を

賞し無格の事を插入し是を茶方の毛利休傳
来の抛入なりし名付て天地の理ハ勿論五常の奥
もなき理に背ける花を挿て賓客の饗應とせし
達し人世に多し是等ハ人をそしる道の茶数の源
言ことを知ける人なし爰にいふ六の世法といふ事ハ
前ケ條よりの事理不二中道第一義諦といふ所也
此深意ハ花茶にかぎらず何れの道にもわたりし
積功なくしてハ至りがたし天地自然乃理を
心より心に傳るといふ不可言なれバ書く筆談

口授の及ばざる所あるべし尤よくよく思慮すべし

右廿五ヶ條ハ初学の為に花道の大旨を聊書示すとの也然ル山野水辺の千草万木生せり随ひて挿し挿方異るといひ程ハ申しつくる書数多あるべし初心の見るまことのうつるべきとおもひてわりしつ切残捕く捨てし知れる人よくあらたむべし

附言

總て挿む所の草木ハ漢名の字義を紀さず唯俗に称ふるところの文字をもちひて

又瓶花の仕方ハ四季混用して其人と乃
貴賤高下を不論まして虚飾技藝ハ可否
にも不拘唯瓶花の取合よろしきとりえこそ予が望に
依て書著ものなり見る人咎むるなかれ

生花御家元
松月堂古流正統諸國會頭職
植松殿御方
百華道人又誌

山櫻
口傳
御直門
八施亭改号
雀壽軒主人

白梅

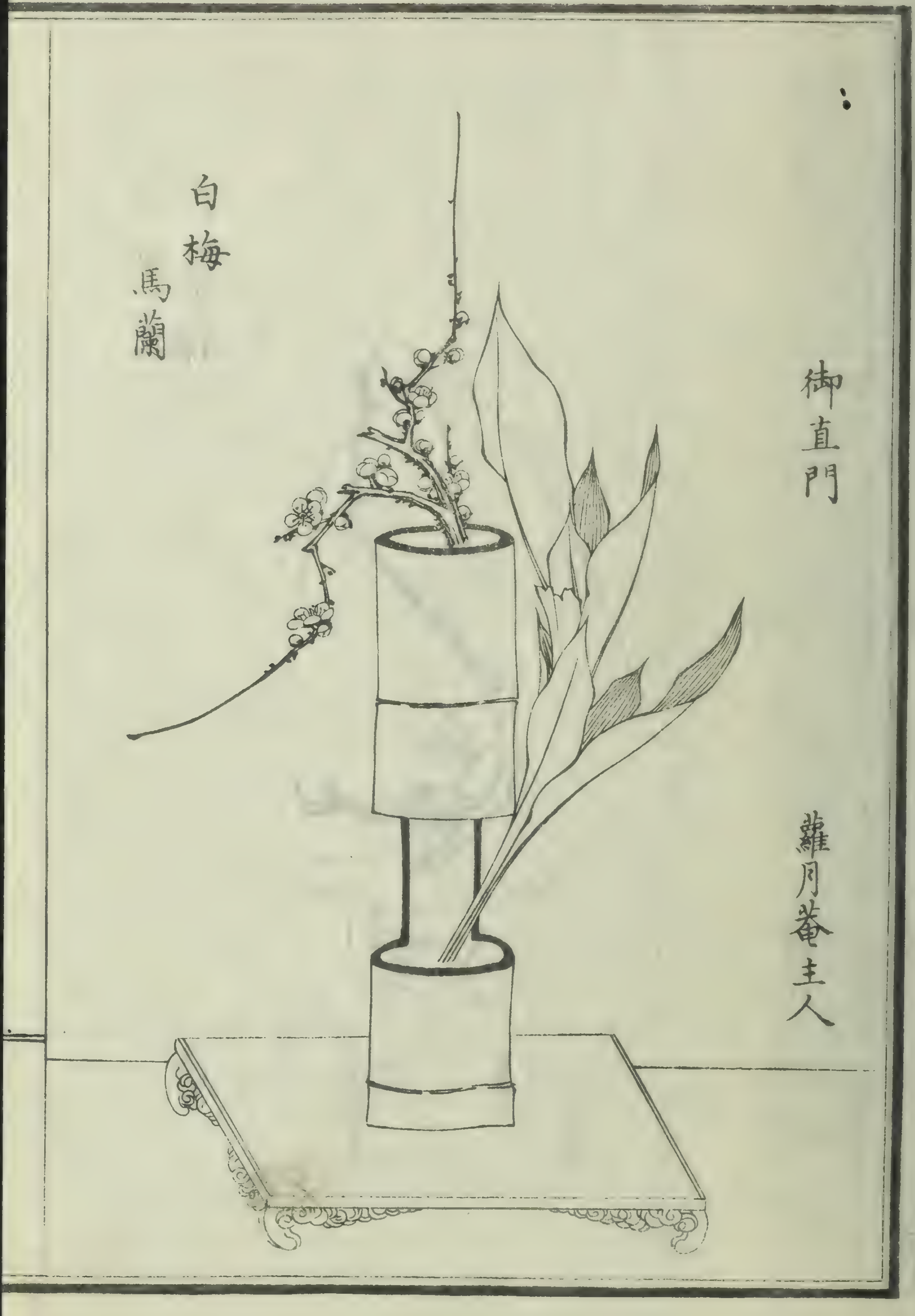
白雲巣
万朶

薊

菊壽軒
桂月

河骨

此君齋
師猷


御直門
蘿月菴主人
白梅
馬蘭

埀柳
赤椿
卯花

白梅
獨遊亭

御門人　竹雨軒露橋

水仙

八朔棋 小菊

太白堂 苍好

馬蘭

鹿友

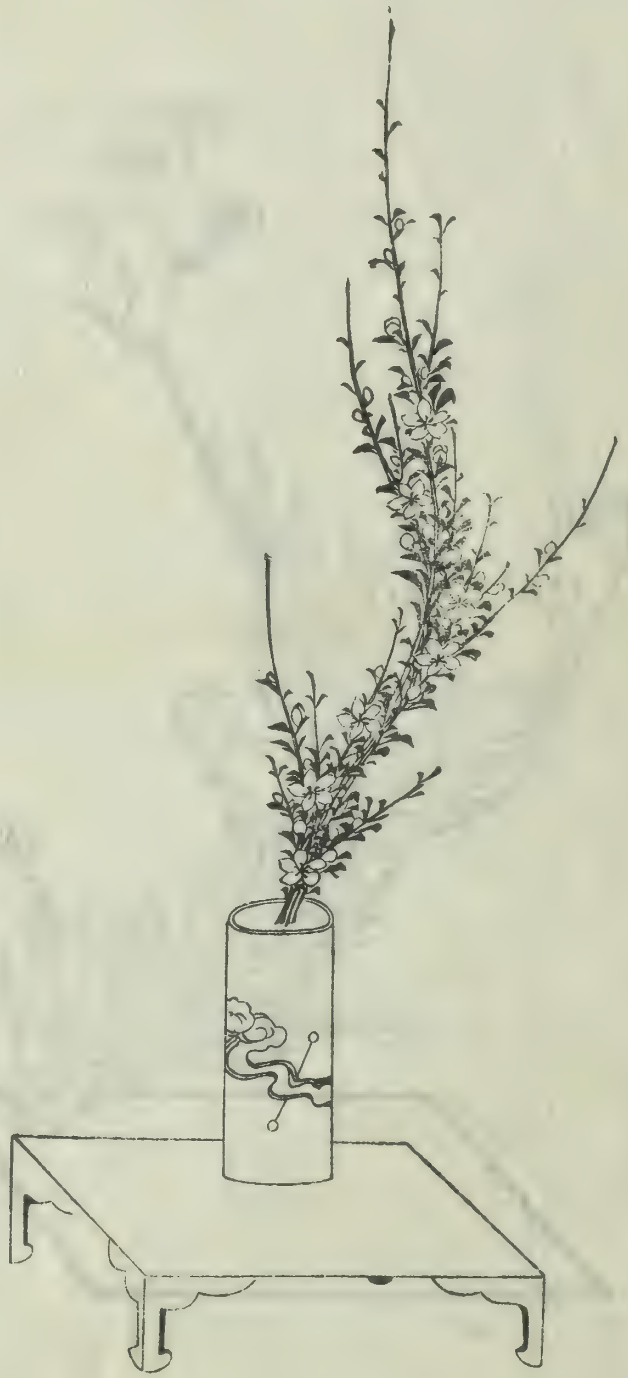
梅
金銭花

錦葉軒
士霜

杜若

友尚軒耕雲

桃



貴行

烏扇

嵩松窩 一鷹

梅

果陰亭
呉雲

羽蘭
水仙
四時齋
歐侄

鈴掛

翫歲軒
有章

黄夏菊
中輪
幽香亭
梅月

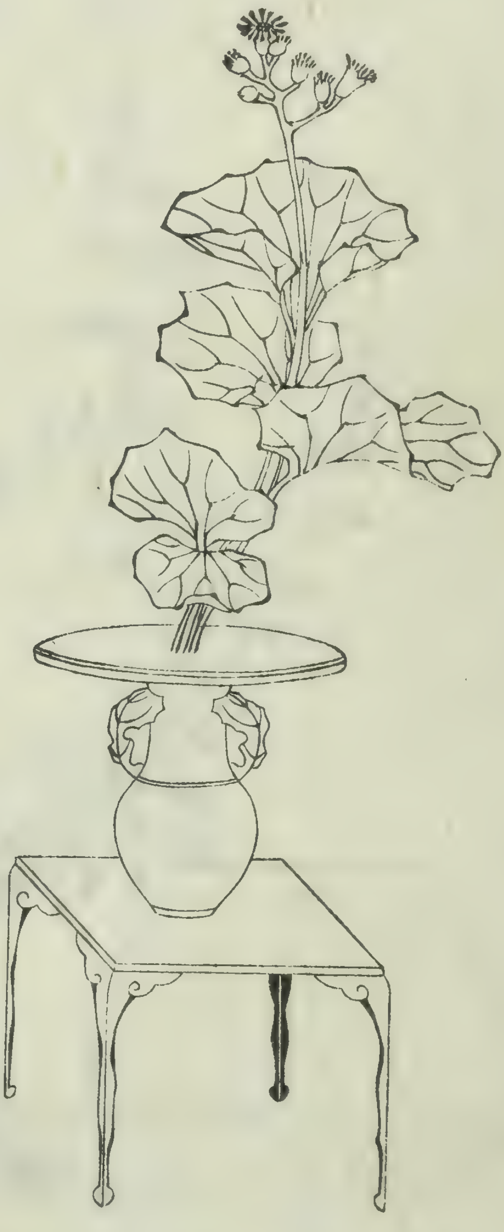
杜若

投龍窟
珠候

江甫草
燕子花

幸般亭
士隱

槖吾



北野氏粂女

山株萸

呉竹亭
篁邨

芍藥

掬香

花菖蒲

柳撫園
紅映

椿

香遠亭

梅颸

杜若

微笑亭
愛花

檀特

湖南

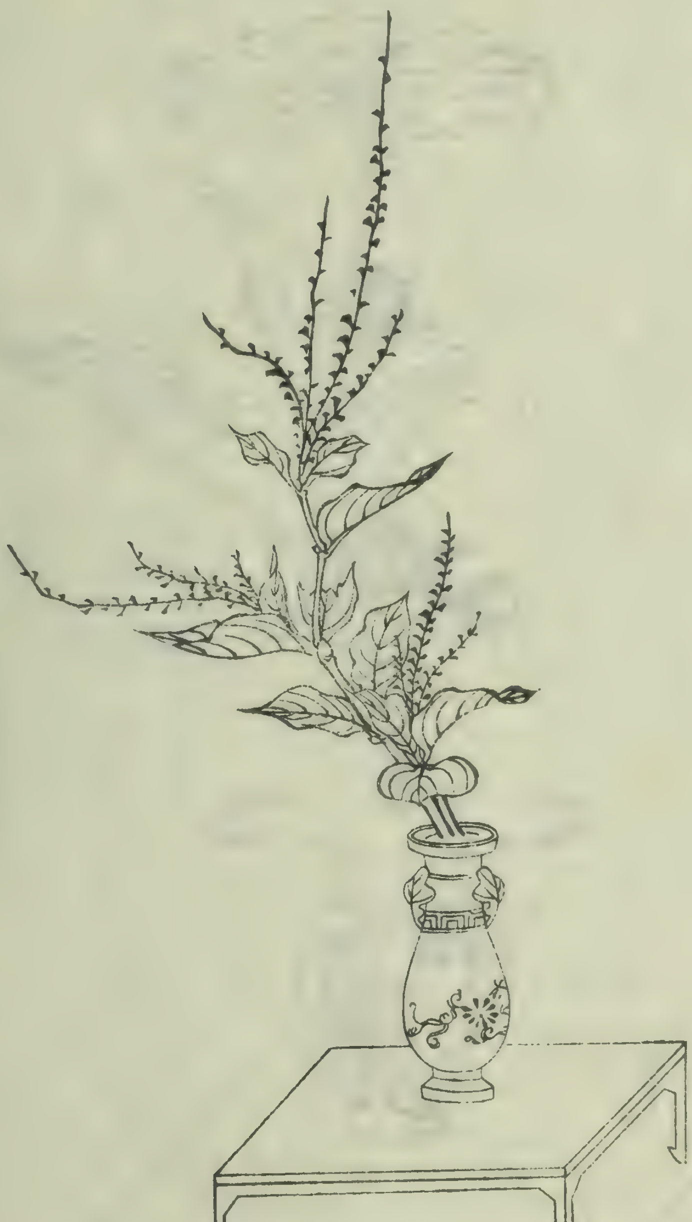
垂櫻
孕著莪

禓月斎
過道

蓮

華林軒一枩

水引草



如石

梅

御門人

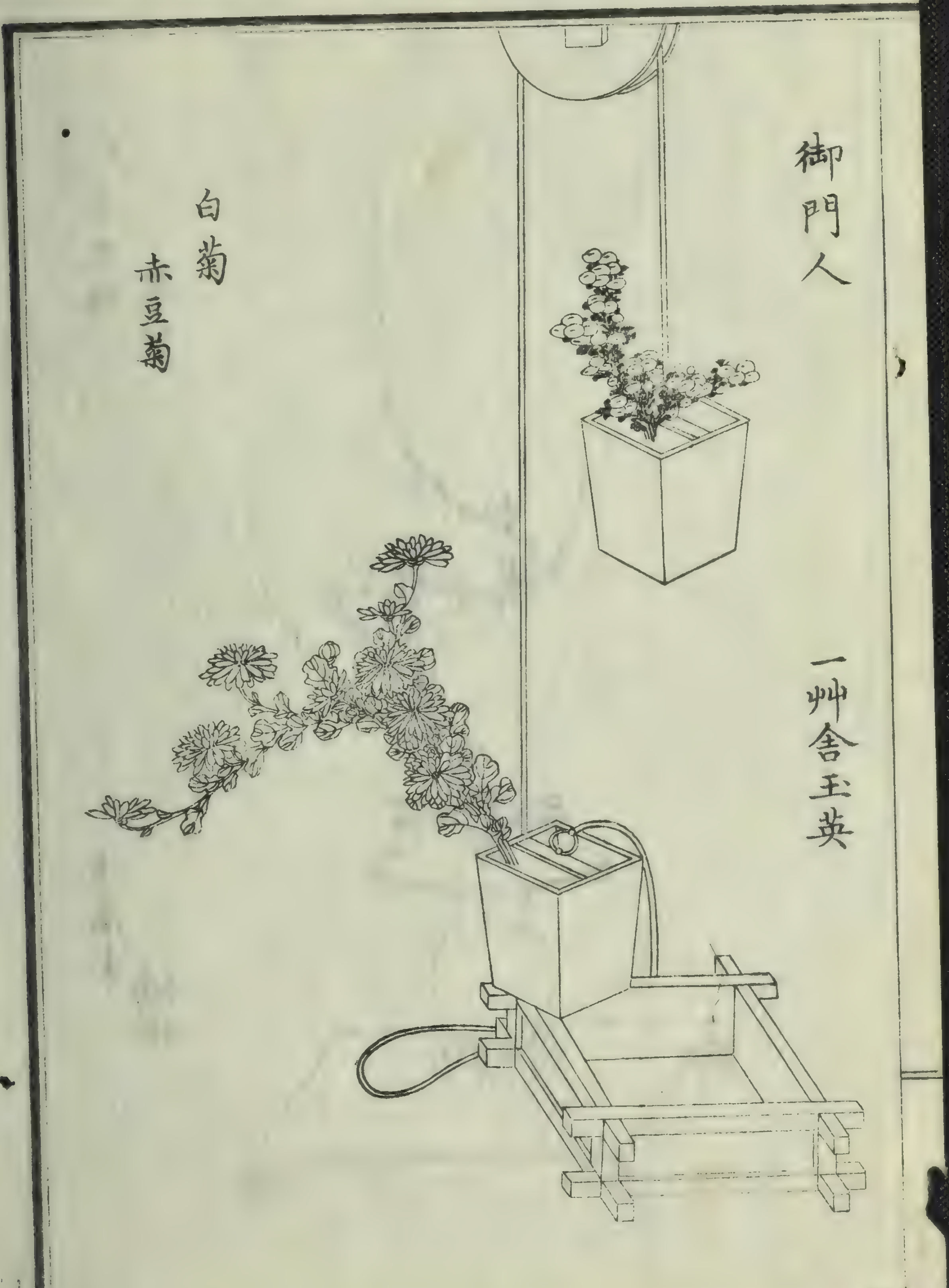
寸松堂寉壽

杜若

紫翠窩
子高

冬至梅
寒菊

清涌舍
楠好

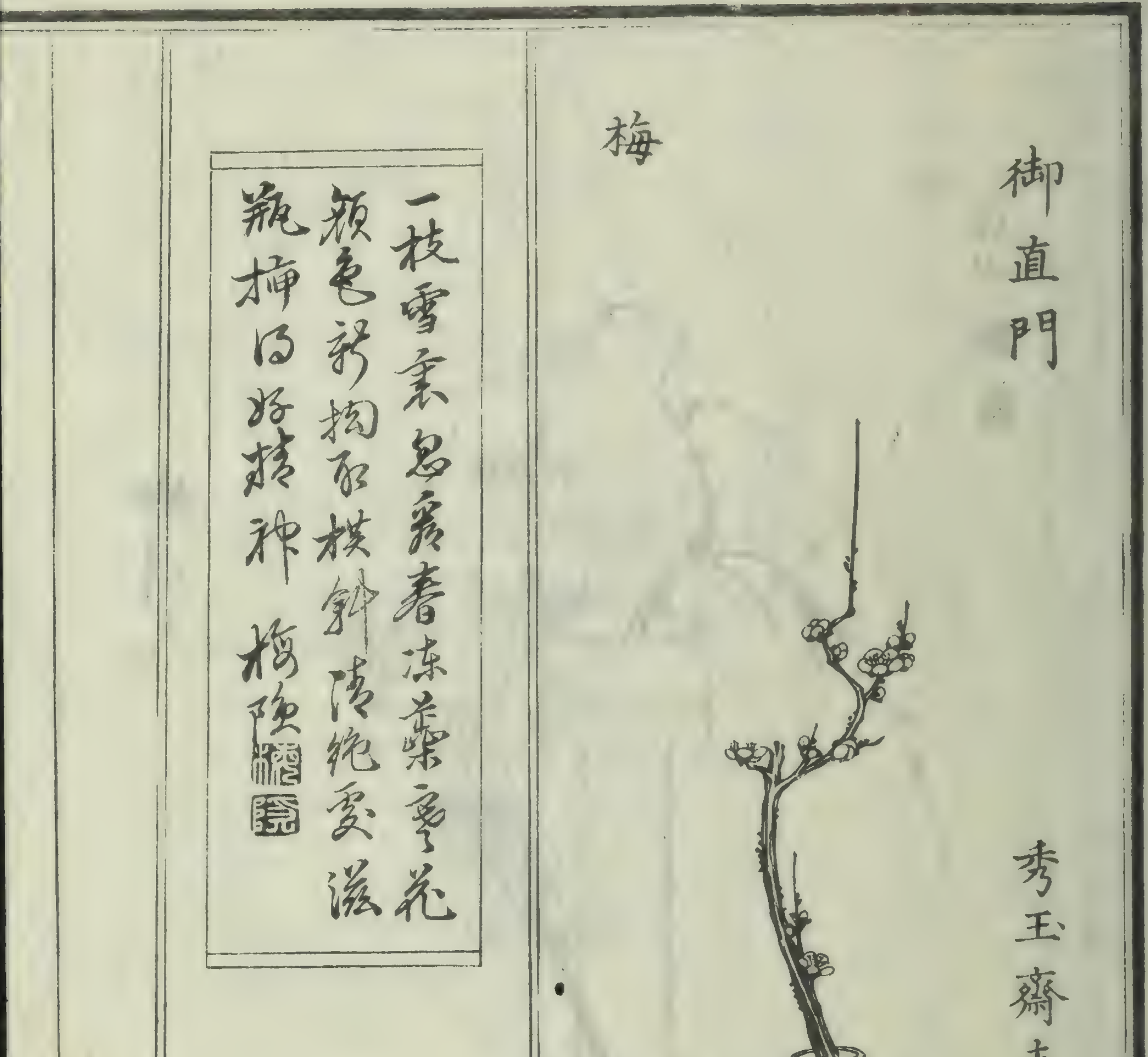

御門人
一艸舎玉英
白菊
赤豆菊

松月堂百瓶　地

FSB

埀柳
羽蘭
小菊

一鳳


梅
御直門
秀玉齋主人

御門人　迦陵臺教有

垂柳
白中輪菊

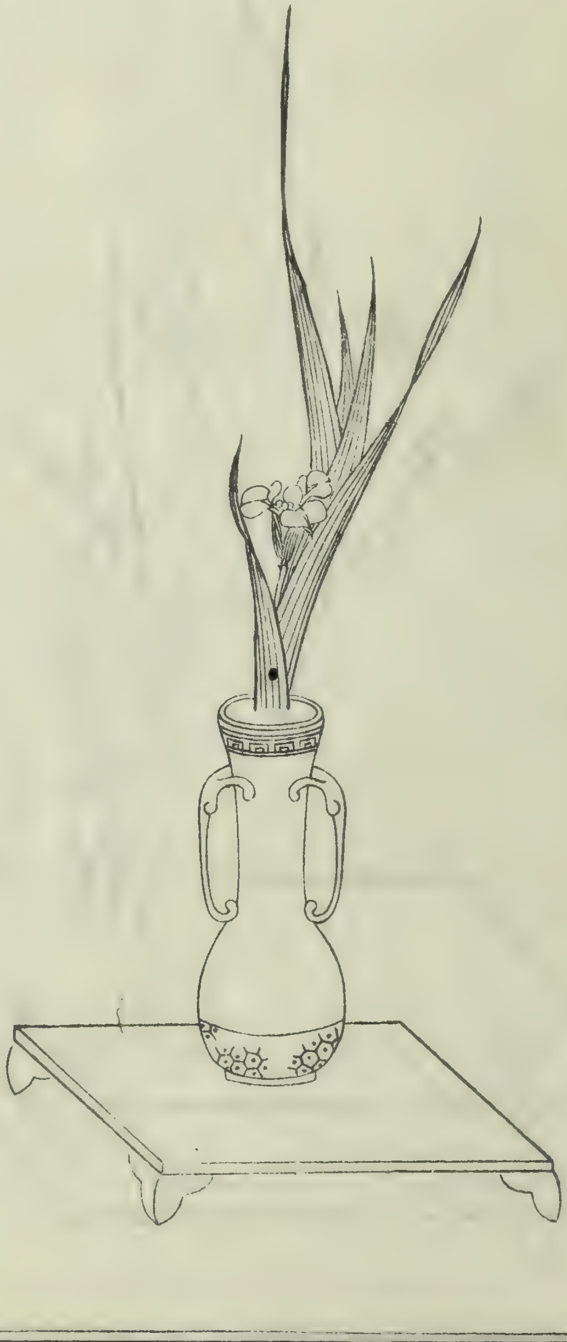
白椿

西疇軒
希陶

梅
椿

如春齋
冨山

杜若



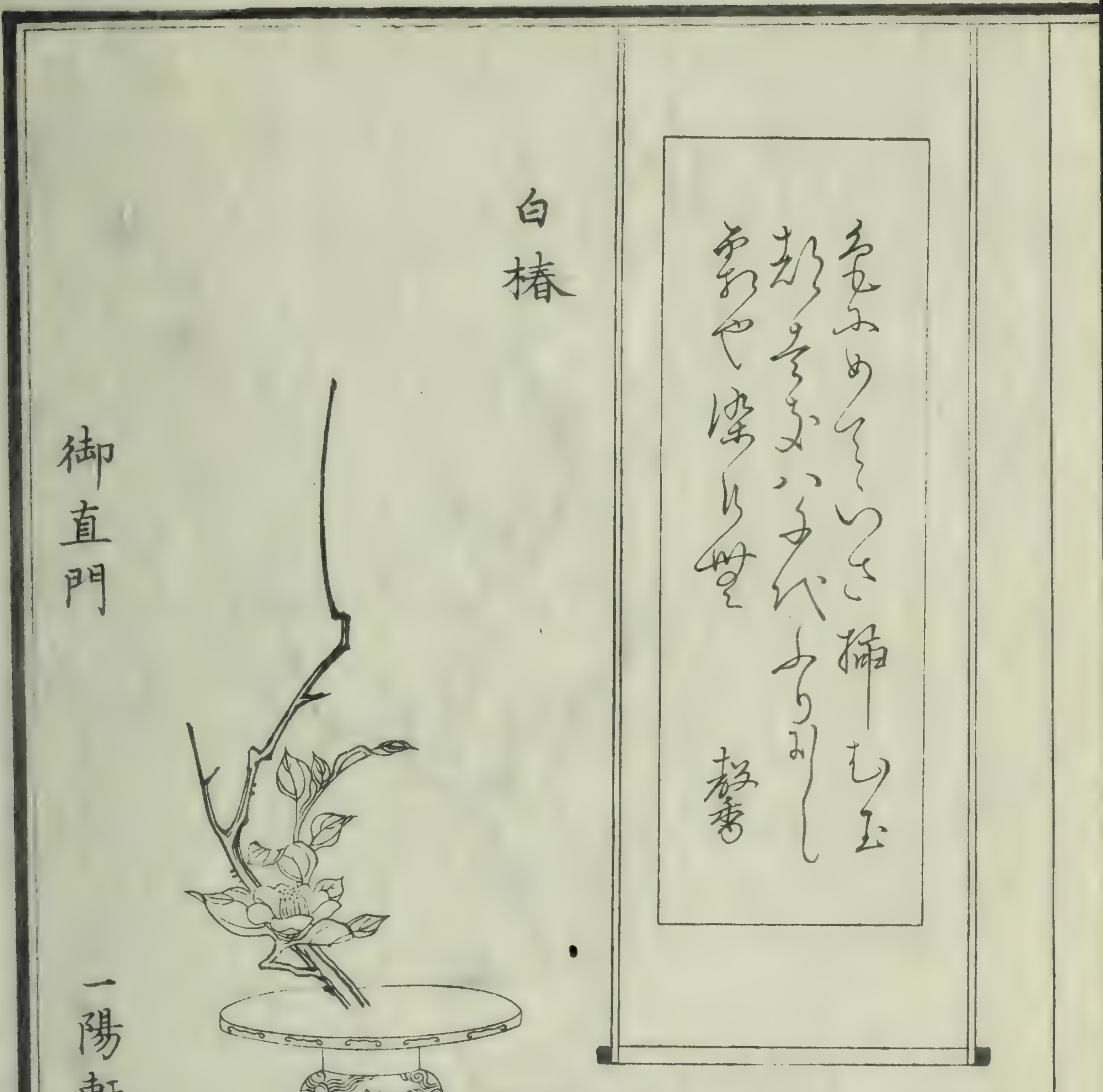
貫道法尼

馬蘭
白梅

仁風軒
草也

梅
羽蘭

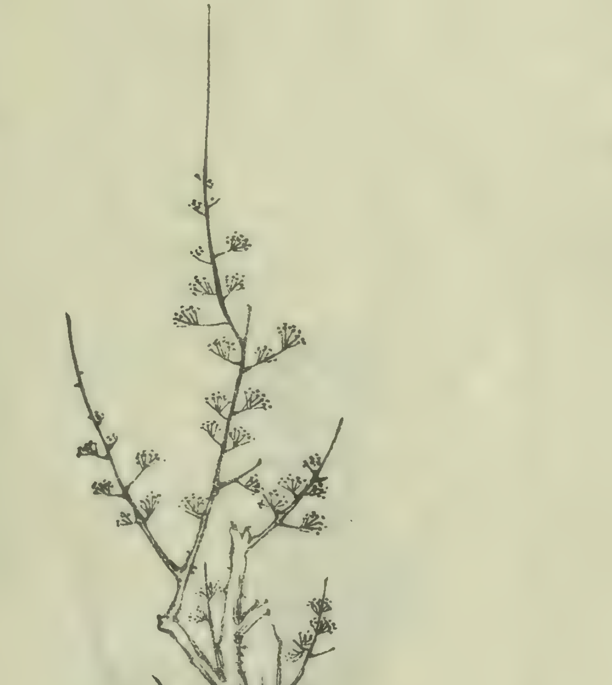
衆香亭
花樂


白椿
御直門
一陽軒主人

燕子花

逢原齋
柳灣

山株萸



壺陽亭
智樂

羽蘭
小菊

御門人

不驕堂龍水

若松
梅

紫峯

八朔梅
中菊

御門人

青山亭兎月

白椿

觀耕亭自樂

御門人　何有軒其雀

白梅

白梅

御門人

梅月軒

白菊

御直門

鳳鳴館主人

白桃
著莪

御門人

雪月堂
梅坡

檜扇

定心亭
黄樹

馬蘭
小菊

御直門

秀花亭主人

杜若

長谷川
登美女

白大輪
小菊

楓錦齋
大秀

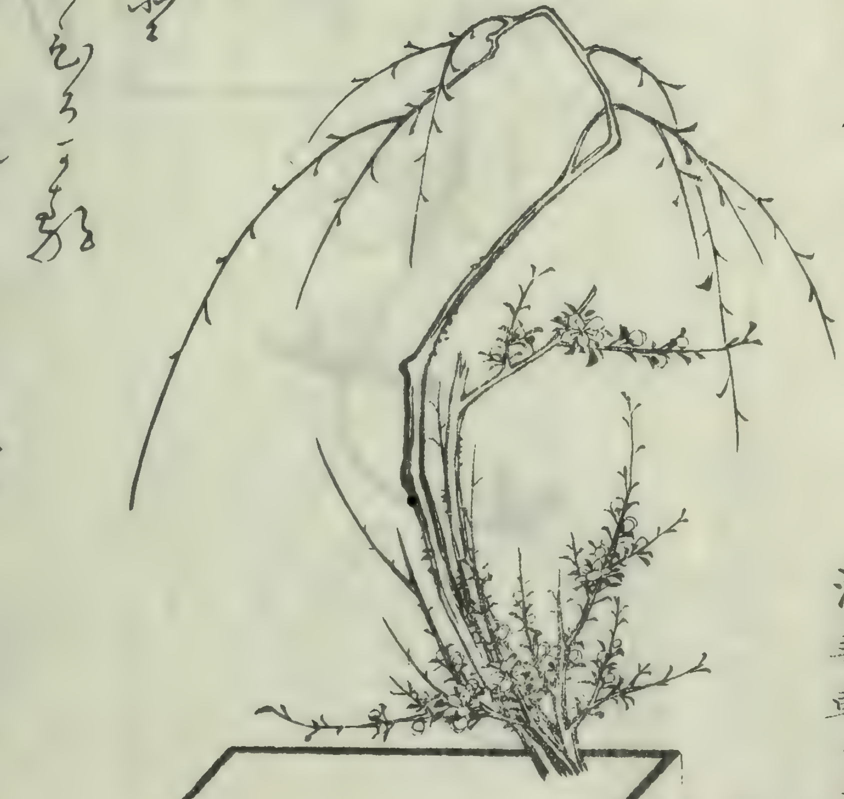
藤　一八

溪岸窟
途柳

御門人

清華軒豊成

垂柳
桃



もゝの香や
ことに耳しひたる翁

一流生　蔵月

燕子花

翠嶋

白梅

大野氏
幸女

唐車前草

千羽園
重寉

枇杷
水仙

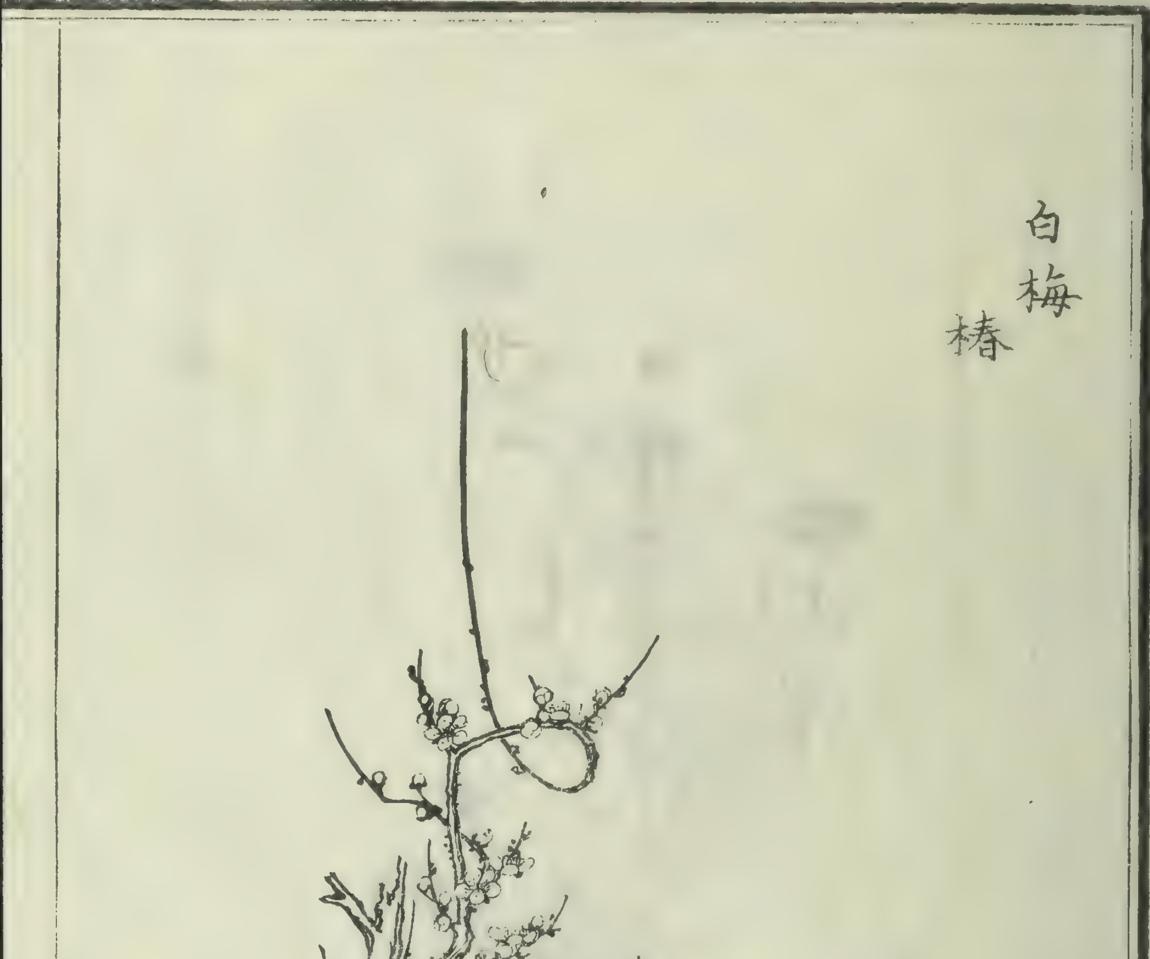
朝暮齋
晴江

白桃
赤椿

水月齋
奇柳

朝鮮檜扇

玉淵


白梅
椿
翠心亭
里濤

中輪菊

松鈴軒
歌山

白梅

林泉堂玉琴

馬蘭 福壽草

蓬洲

白椿

松翠軒

紫苑

葉月

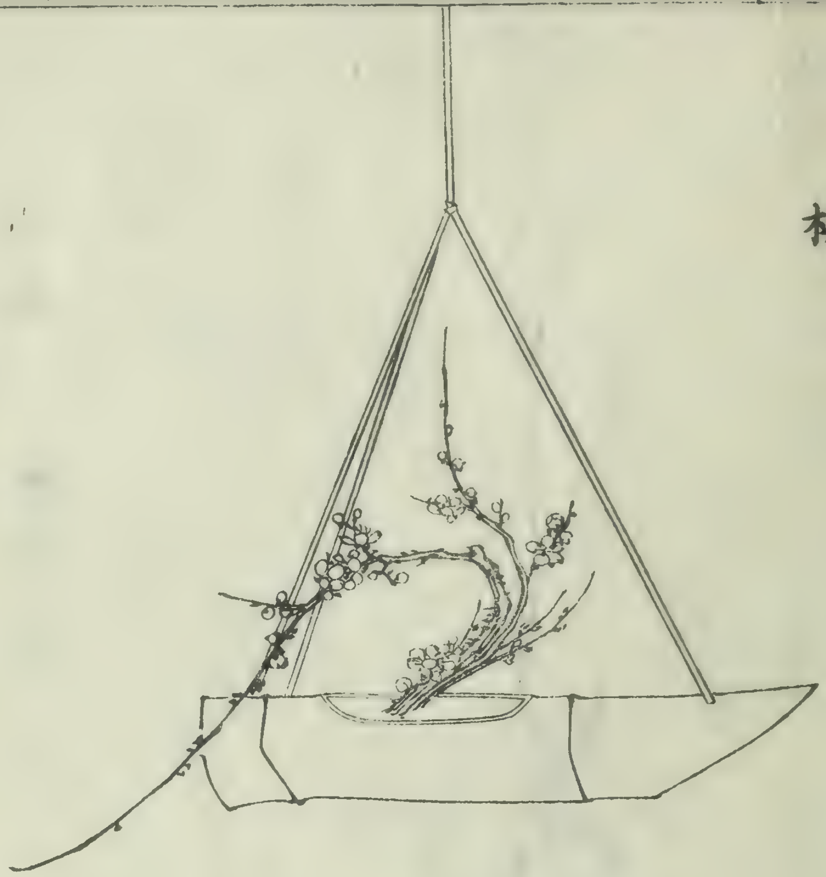
狗子柳　羽蘭
小菊

枝友

莢子花

一枝軒花玉

梅



春暁舍
梅笑

白梅
御門人
百艸舎

水仙

松雪亭
玉光

花菖蒲

南耕

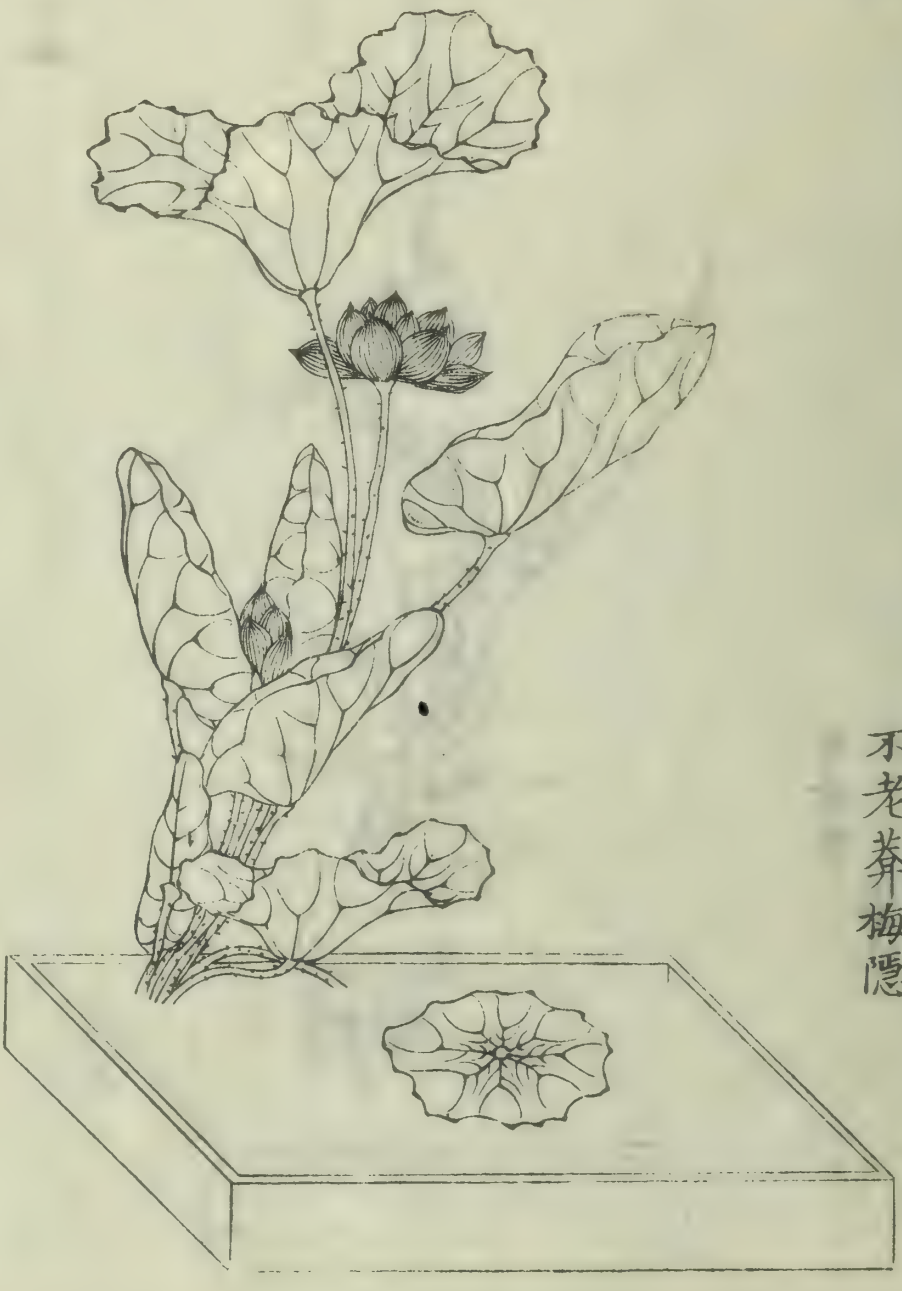
羽蘭
白中菊

碧春亭
希箬

杓子柳
寒菊

壽山軒
一雀

蓮



不老葊梅隠

薄紅梅

香雪亭
若水

白梅
徐〻亭

著莪

花遊

山茱萸

荷径

杜若

一鴉